

夜釣

泉鏡花

青空文庫

これは、大工、大勝のおかみさんから聞いた話である。

牛込築土前の、此の大勝棟梁のうちへ出入りをする、一寸使へる、岩次と云つて、女房持、小兒の二人あるのが居た。飲む、買ふ、搏つ、道樂は少もないが、たゞ性來の釣好きであつた。

また、それだけに釣がうまい。素人にはむづかしいといふ、鰻釣の絲捌きは中でも得意で、一晩出掛けると湿地で蚯蚓を穿るほど一かゞりにあげて來る。

「棟梁、二百目が三ぼんだ。」

大勝だいかつの臺所だいどころぐち口へのらりと投込なげこむなぞは珍めづらしくなかつた。

が、女房にようぼうは、まだ若いわかのかに、後生願ごしやうねがひで、おそろしく岩いは

さんの殺生せつしやうを氣きにして居ゐた。

霜月しもつきの末頃すゑごろである。一晚ひとばん、陽氣やうきちが違ちがひの生なまぬる暖かぜい風かぜが吹ふ

いて、むつと雲くもが蒸むして、火鉢ひばちの傍そばだと半纏はんてんは脱ぬぎたいまでに、

悪汗わるあせが浸にじむやうな、其暮そのくれ方がただつた。岩いはさんが仕事場しごとばから――

行願寺ぎやうくわんじ内ないにあつた、――路地ろぢうらの長屋ながやへ歸かへつて來くると、何なに

かものにそゝられたやうに、頻しきりに氣きの急せく様子やうすで、いつもの錢せんた

湯うにも行ゆかず、さくくと茶漬ちやづけで濟すまして、一寸ちよつと友ともだちの

許とこへ、と云いつて家うちを出でた。

留守るすには風かぜが吹募ふきつの。戸障子としやうじががたくな鳴なる。引窓ひきまどがば

たくと暗い口を開く。空模様は、その癖、星が晃々して、
 澄切つて居ながら、風は尋常ならず亂れて、時々むく／＼と古綿を積んだ灰色の雲が湧上る。とぼつりと降る。降るかと思ふと、颯と又暴びた風で吹拂ふ。
 次第に夜が更けるに従つて、何時か眞暗に凄くなつた。
 女房は、幾度も戸口へ立つた。路地を、行願寺の門の外までも出て、通の前後をした。人通りも、もうなくなる。……釣には行つても、めつたにあけた事のない男だから、餘計に氣に懸けて歸りを待つのに。——小兒たちが、また悪く暖いので寝苦しいか、變に二人とも寝そびれて、踏脱ぐ、泣き出す、着せかける、賺す。で、女房は一夜まんじりともせず、鳥の聲を

聞いたさうである。

然ままで案ずる事はあるまい。交際のありがちな稼業の事、途中で友だちに誘はれて、新宿あたりへぐれたのだ、と然う思へば濟むのであるから。

言ふまでもなく、宵のうちは、いつもの釣だと察して居た。内から棹なんぞ……鉤も糸も忍ばしては出なかつたが——それは女房が頻に殺生を留める處から、つい面倒さに、近所の車屋、床屋などに預けて置いて、そこから内證で支度して、道具を持つて出掛ける事も、女房は薄々知つて居たのである。

處が、一夜あけて、晝に成つても歸らない。不斷そんなしたら

でない岩いはさんだけに、女房にようぼうは人一倍ひといちばい心配しんぱいし出した。

さあ、氣きに成なると心配しんぱいは胸むねへ瀧たきの落おちるやうで、——帶引おびひきし緊きん

めて夫をととの……といふ急せぎ心こころで、昨夜ゆうべ待ち明あかした寢ねみだれ髪がみを、黄つ

楊げの鬢びんぐし櫛しで搔かき上げながら、その大勝だいかつのうちはもとより、慌あわた

だしく、方々ほう／＼、心こころ當あたりを探さがし、つた。が、何處どこにも居ゐない

し、誰たれも知らぬ。

やがて日ひの暮くれるまで尋たづねあぐんで、——夜よあかしの茶飯ちやめしあん

かけの出でる時刻じこく——神樂坂かぐらざか下した、あの牛込うしごめ見附みつけで、顔馴染かほなじみだ

つた茶飯屋ちやめしやに聞きくと、其處そこで……覺束おぼつかないながら一寸ちよつと心こころ

當あたりが付いたいたのである。

「岩いはさんは、……然さうですね、——昨夜ゆうべ十二時頃じふごころでもございまし

たらうか、一人ひとりで來きなすつて——とうく降ふり出だしやがつた。こいつは大降おほふりに成ならなけりやいゝがつて、空そらを見みながら、おかはりをなすつたけ。ポツリく降ふつたばかり。すぐ降ふりやんだものですから、可いい鹽梅あんばいだ、と然さう云いつてね、また、お前まへさん、すたく駈かけ出して行ゆきなすつたよ。……へい、えゝ、お一人ひとり。——他ほかにや其その時ときお友達ともだちは誰だれも居ゐずさ。——變へんに陰氣いんきで不氣味ぶきみな晩ばんでございました。ちやうど來きなすつた時とき、目白めじろの九こゝつを聞ききました、たが、いつもの八やつころほど寂ひつそり寞りして、びゆうく風かぜばかりさ、おかみさん。」

せめても、此これだけを心遣こゝろやりに、女房にようばうは、小兒こどもたちに、まだ晩ばんの御飯ごはんにもしなかつたので、坂さかを駈かけ上あがるやうにして、急いそい

で行願寺内へ歸ると、路地口に、四つになる女の兒と、五つ
 の男の兒と、廂合の星の影に立つて居た。

顔を見るなり、女房が、

「父さんは歸つたかい。」

と笑顔して、いそぐして、優しく云つた。——何が仕うして
 も、「歸つた。」と言はせるやうにして聞いたのである。

「不可ない。……」

「うゝん、歸りやしない。」

「歸らないわ。」

と女の兒が拗ねでもしたやうに言つた。

男の兒が袖を引いて、

「おとつ
父さんは歸らないけれどね、いつものね、鰻が居るんだよ。」

「えゝ、え、」

「おほ
大きな長い、お鰻よ。」

「こんなだぜ、おつかあ。」

「あれ、およし、魚尺は取るもんぢやない——何處にき……」

そして？

と云ふ、胸の瀧は切れ、唾が乾いた。

「臺所の手桶に居る。」

「誰が持つて來たの、——魚屋さん？……え、坊や。」

「うゝん、誰だか知らない。手桶の中に充満になつて、のたくつてるから、それだから、遁げると不可いから蓋をしたんだ。」

「あの、二人で石をのつけたの、……お石塔のやうな。」

「何だねえ、まあ、お前たちは……」

と叱る女房の聲は震へた。

「行つてお見よ。」

「お見なちやいよ。」

「あゝ、見るから、見るからね、さあ一所においで。」

「私たちは、父さんを待つてるよ。」

「出て見まちよう。」

と手を引合つて、もつれるやうにばらくと寺の門へ駈けなが

ら、卵塔場を、灯の夜の影に揃つて、かはい、顔で振返つて、

「おつかあ、鰻を見ても觸つちや不可いよ。」

「觸るとなくなりませよ。」

と云ひすてに走つて出た。

女房は暗がりの路地に足を引れ、穴へ掴込まれるやうに、

頸から、肩から、ちり毛もと、ぞつと氷るばかり寒くなつた。

あかりのついた、お附合の隣の窓から、岩さんの安否を聞か

うとしでもしたのであらう。格子をあけた婦があつたが、何にも

女房には聞えない。……

肩を固く、足がふるへて、その左側の家の水口へ。……

……行くと、腰障子の、すぐ中で、ばちやく、ばちやり、

ばちやくと音がする。……

手もしびれたか、きゆつと軋む……水口を開けると、茶の間

も、かまち 框も、びろ だゞつ廣くおほ大きな穴を四角に並べて陰氣である。ひきま 引窓に射す、なん 何の影か、かげ 薄あかりに一目見ると、唇がひつつつた。
 ……何うして小兒の手で、と疑ふばかり、おほ 大きな澤庵石が手桶てをけの上に、うへ づしんと乗つて、の あだ黒く、ぐろ 一つくびれて、ひと ぼうと浮いて、いや 可厭なものかたちの形に見えた。
 くわツと逆上せて、のぼ 小腕こがひなに引ずり退けると、ひき 水をみづ 刎ねて、な ちやくくと鳴つた。

もの音もきこえない。

ふた 蓋を向うへはむか づすと、みづ 水も溢れるまで、あふ 手桶てをけの中に輪なかをぬめらせた、うなぎ 鰻がひとすぢ 一條、たゞひとすぢ 唯一條であつた、うね のろくと畝つて、とが 尖つた頭あたまをか 恚うあげて、にようぼう 女房にようぼうのあおしろ 蒼白かほい顔を、じつ 凝と視た。——と

言い
ふ
の
で
あ
る
。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十四」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日第1刷発行

1987（昭和62）年10月2日第3刷発行

初出：「新小説」春陽堂

1911（明治44）年

※初出時の表題は、「鰻」です。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>